

幻嗅出現後、頻回に迷子になった高齢者側頭葉てんかんの一例

稲山靖弘¹⁾ 村田智恵²⁾

1) 渡辺病院、2) ケアプランセンターわたなべ

1. はじめに

高齢者の徘徊、異臭などは、認知症のBPSDと捉えられ、診断が困難な場合がある。今回われわれは、異臭、意識消失、徘徊をみとめ、MRIにて側頭葉てんかんと診断しえた一例を経験したので報告する。

2. 症例

【症例】70才台、男性

【初診時主訴】松脂の臭いがした後、迷子になる

【既往歴】高脂血症

【家族歴】特記すべきことなし

【生活歴】中学卒業後、林業、通信関係に従事、70歳退職。

【現状歴】x-1年秋、散歩中、松脂のくさったような臭いを感じた。まわりに、それらしき風景はなく、気がつくと、違う場所にいた。そのようなことを数回認めたため、x年6月、耳鼻科と脳外科を受診したが異常なしといわれた。しかしながら、月2回と増加してきたため、当院受診した。

【初診時所見】意識は清明、神経学的に異常を認めなかった。本人から、「約一年ほど前に、散歩中、松脂の臭いがしてきた。周囲を見ても、臭いのもとはなく、気がつくと、もといた場所と200~300mくらい移動していた。転倒はしていない。最近では、月に2回と増加している。」という訴えがあった。

【検査所見】HDS-R:27点、立体模写:完成、SDS:23、血液生化学検査:異常なし、心電図:異常なし、頭部MRI:FLAIR像にて、右海馬に硬化像を認めた、頭部MRA:特に異常なし、脳SPECT:明らかな左右差なし。

【治療経過】臨床所見、画像所見から、側頭葉てんかんと考え、カルバマゼピン100mg投与した。翌週受診したとき、松脂の臭いはあるが、迷子がなくなったため、200mgとした。一ヶ月後、松脂の臭いは、なくなり、迷子も消失していた。ふらつき、皮疹もなく、経過していた。CBZ血中濃度、4.7μg/mL。受診1年経過も、特に問題なく経過している。

3. 倫理的配慮

本人およびご家族に研究、発表の趣旨を口頭で説明し、同意を得た旨、診療録に記載し、発表においては個人が同定されないよう個人情報の保持に留意した。

4. 考察

高齢者の徘徊、異臭などは、認知症のBPSDと捉えられ、診断が困難であることがあるが、今回われわれは、MRIのFLAIR像にて海馬硬化をみとめ、容易に側頭葉てんかんと診断でき、適切な画像診断の有用性を再認識した。